

O A A 総会松江大会雑感

山根 秋郷 A. Yamane
(東京都 目黒区)

■チベットによろこそ

2010年9月18日(土)から19日(日)、松江駅前の「松江テルサ」でOAA総会が開かれた。全国から凡そ50名が参集して楽しいひとときであった。今どき、地元の友人と話をするとき「島根県は日本のチベットだ・・・」との会話が出てくる事がある。これは山陽に対する日本海側の山陰を比べて、新幹線もなく、高速道路などが十分でない事や交通不便な様子を言ったのであるが、確かにそれは的を射ているかもしれない。まあ逆に、現代のように交通が便利でどこへでも行ける時代には、かえって“チベット”などへ行ってみたいと思うのは、たいへん人間的なのかもしれない。その“チベット”に沢山の人が参集したと思うと、地元出身者としては全国の天文仲間に対して、本当に有難い気持である。また、どれほど集まれるのか判らない状況で、松江星の会を中心として、開催をサポートされた地元の天文仲間の方々のご苦労と熱意に感謝したいと思う。

■総会

初日の土曜日は、総会と記念講演が行われた。総会は予定通り議事進行され定刻に終了した。表彰式では天体発見賞8名、東亜天文学会賞は前OAA会長の長谷川一郎氏、山本一清記念東亜天文学会学術研究奨励賞には松本直弥氏が、それぞれ表彰された。

■記念講演：藤岡大拙氏「出雲の魅力」

筆者は藤岡大拙氏に面識はなく、メディア等で時折お名前をお聞きするだけである。氏はこの地方を代表する郷土歴史家、民俗学研究的な学者として知名度が高い方と存じ上げている。OAA大会の初めに天文学的話題ではないが、郷土歴史の講演を入れたことは、当地方を少しでも知って頂くのに、時宜を得た企画だと思う。内容は出雲地方に関するものであり、本稿では割愛する。

■夕陽の懇親会

総会后、500m程離れた島根県立美術館のレストランに移動して懇親会を楽しんだ。JR松江駅前から湖岸までわずかな距離ではあるが、道路が拡幅されて、良い通り道になっていることが幸いである。周辺は城下町の寺町であり、元々細い道路であったが、戦災や火災等も少なく、大規模な街並み開発はなかなか進まなかった。

県立美術館は宍道湖に面しており、湖面と対岸の街並みが見える。松江大会事務局の安部裕史氏の挨拶で懇親会が始まる頃に、丁度天気が良く湖の向こうへ沈み行く夕陽を鑑賞出来た。湖岸のテラスも多くの人々で賑わっている。一通り、簡単ながら全員が自己紹介をしつつ、また一人と少しずつ知り合いが増えて来るのがありがたい。

今回は、静岡の掛川市から昨年の方声コーラスのメンバーが駆けつけて来られ、大変美しい歌声を聞くことが出来た。来年は、東京が開催地で“チベット”よりは随分と近いので、

是非またお出掛け願えればと思う。楽しい時間はあっという間に過ぎ、県立施設内レストランの都合で、お開きの時間が決まっております、話をもう少し長く出来たらよかったですと思われる人もいたでしょう・・・

■翌日の日曜日は、研究発表と特別講演などが行われた。以下は発表順に記載する。

■黒田武彦氏 公開天文台の現状とその活用
今や公開天文台は全国で大小400以上あるが、公開施設として十分にその役目を果たしているとはいえないので、それを改善していきたい。

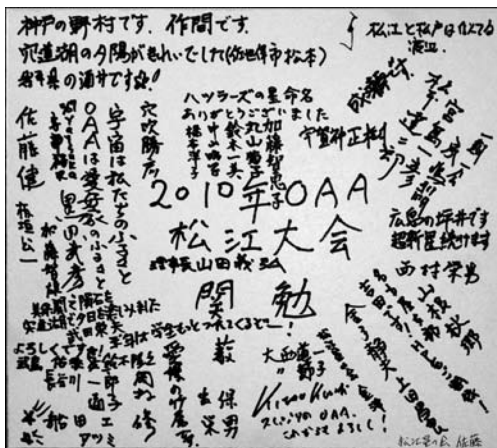
■北尾浩一氏 天文民俗学の課題
闘病生活の中で全国を丹念に歩き、現場調査の記録を集めに取り組んだ10数年の歩みを語る。天文民俗学構築をすすめ、星名伝承を学校・社会教育現場で活用していきけるのに役立つ事典を作ることが当面の課題である。

■松本 優氏 美保関隕石物語

久しぶりに松本 優氏を拝顔した。ついこないだの事のように思っていたが、既に18年も過ぎ去っている。OAA 理事長になられた山田義弘氏が、この頃に松江の営業所長として赴任、島根の県立三瓶自然館、鳥取のさじアストロパーク等の建設事業にも参画された。山田氏は赴任後に松江で山陰天文協会を設立、松江駅前のホテルで協会の設立総会があった時、初めて氏にお目にかかったが、そのしばらく後に、美保関隕石が落下したと思う。

松本家に激突した隕石は複数に分裂して、大きな火の玉が飛んだらしかった。瓦屋根をぶち抜いて、2階天井を抜け、2階床を壊し、1階床を通過して土間で停止した。漬物石くらいの大きさの隕石である。落下当夜は、雷雨で山陰地方では誰もその目撃者が無く、たしか遠く離れた地方の目撃観測が多数あったと思う。もう1個の分裂した隕石を探そうと山田隊長以下、海と山の大捜索を行なった。その撮影のためにテレビ局も東京から駆けつけて来た。残念ながら海は廣大無辺、山は深山幽谷、人智の及ぶ所ではなかったようだ。その折に松本家を皆で訪問して、実物の隕石と対面し松本氏から色々なお話を伺った記憶がある。落下地点横には、公募された隕石モニュメントが設置された。

早い時点で研究分析してこそ価値があるという国立科学博物館と、現物をそのまま保存展示して地方活性の起爆剤にしたいという自治体（当時は美保関町）の間で、半年くらい保管先をめぐる綱引きがあった。その後に「メテオプラザ」という隕石展示施設が出来てそこに収まることとなった。松本家の人々も落下の瞬間そのものを目視したわけではないが、落下衝突音（≒家屋破壊音）を聴かれた貴重な証人でもある。この落下による家屋の損害補償にはJA保険が適用された。



■作間幸太郎氏 西暦 714 年の唐開元占経の彗星記事について

中国占術の古典に記載がある紀元 236 年から 423 年にかけての 9 個の彗星出現記録を翻訳解説。236 年は同時期に 3 個出現。365 年は春に出現し、夏が過ぎ冬になっても消滅しなかった。

■大西道一氏 カメラオブスキュラの復元

風景等を鏡に反射させてスリガラス等に投影し、その像をなぞって写生する装置を実際に製作した。レンズや暗箱の設計を工夫して復元した。

■上田昌良氏 JAXA はやぶさ カプセル地上観測チームに参加して

はやぶさの大気圏突入の様子をビデオ撮影した記録。アマチュアであるが、JAXA から観測希望者の公募があり、流星観測の立場から申し込んでおいたので参加出来た。満月の明るさで完全に計算通りの位置、時刻に正確に落下した。

■安部裕史氏 新屋太助大久保日記の中の変星と皆既日食

江戸末期の松江地方の商人の日記（松江市の指定文化財）に記された天文現象の紹介。一つは 1830 年の彗星（同定出来る星は見つかっていない）、一つは 1852 年の皆既日食（次回の松江における皆既日食は 2947 年）。

■酒井 栄氏 小惑星「平泉」の紹介（ポスター発表）**■特別講演：関 勉氏** 「クロイツ属彗星 発見の日」

関氏のお話は、かねてから拝聴してみたかった。会場に日本で唯一の？コメットメダル、発見の際に使用され今や希少品となったネジ巻き式腕時計、観測の際のノルトン星図などを所持になられていて、大変めずらしいものであった。

冒頭に次の様なお話があった。「夕べは美しい宍道湖の夕陽を見ることが出来た。高知の太平洋ならダルマ型の太陽が見えるので、注視していたが円いままで沈んで行った。内陸の気象と海洋の気象は異なるものだと思った」そういう太陽はあまり、見た記憶がないので、機会があれば眺めて見たいものである。

この OAA の当日は、あのイケヤ・セキ大彗星が発見された記念の 9 月 19 日である。お話は、氏のご著書「宇宙の放浪者」に書いて有るような内容であるが、本にはない話もあり、その時の情景が目浮かぶようである。メモもわずかで正確ではないかもしれないが、大筋は以下のような話であったと思う。

「発見当日は台風が通過しており、私は 4 時前までうとうとしていた。雨で曇りだから各地のライバルも見えないから、安心して眠れると安心だった。ところが 4 時頃雨音が止んでいるのに気が付いた。雨戸を開けると外は降るような星空で、星がいっぱい流れ込んできた。「大変だ」と私は、寝間着のまま物干し天文台に飛び出し、愛用の望遠鏡を設置して掃天を開始した。4 時半にはもう夜明けだ。視野を水平に移動していく。視野 3 度半の望遠鏡で、太陽の近くの東北の低空を 10 分から 15 分探す。続いて東南の低空を探す。下弦の月がある。視野の中心に目を置いて動かさない。レンズの中でポーっとした星像があればすぐにわかる。コマ収差などのあるレンズを使用すると、周辺部で乱れた星像があるときに恒星な

のか、彗星状天体なのかを識別できないものだ。

空が明ける前に、見慣れない彗星状天体を発見した。低空 10 度位に 8 等星の天体である。星の配置は十数年の間頭の中にある。星図を一見もせずに、それは直感的に彗星に間違いないと確信できた。そして、朝の郵便局へ自転車で急ぎ、天文台へ電報を打ち終わった。その時疲れ果て、何時も見ている高知城の白壁が純白に光って見えた。その日天文台からの連絡より早く、新聞社からの取材電話がきて、浜松のライバル池谷氏がわずか早く発見したことを知った。この彗星は太陽の近傍を通過する、今世紀最大級のクロイツ群と呼ばれる大彗星であった。

フランスのリゴレーという天文学者は、1 回の観測位置であるが、彗星の発見位置を見てそれがクロイツ群であることを知ったという。既に軌道が判っている彗星である。太陽に近すぎて、接近のたびに複数に分裂して同じ軌道を周回するものだという。その時は、そういう言葉も知らない時期であった。」時間一杯に彗星の発見後の大騒ぎの様子や、芸西天文台、クロメリン彗星と山崎氏、テンペル第 2 彗星と小平氏、昔の殿様の望遠鏡のことなど大変楽しく聞かせていただいた。

さらに「土佐は昔から天文関係の風土、人脈が受け継がれてきている。郷土出身の五藤光学会長が芸西天文台という大型施設を県に寄贈される折に、その施設に見合った〈熱心な使い手〉がいるのかという問題があった。その〈使い手〉に自分になろうと決心した。それまで観測拠点であった高知市の空は次第に明るくなっており、車で一時間かかる山まで長い間通っている。この大型望遠鏡は彗星捜索には大きすぎる、銀河系捜索には小さすぎる、何を目的にすべきかと考えると、やはり小惑星の捜索及び周期彗星の検出が最も適しているとの結論になった。結果的にそれは大変良い成果を上げて来ている。小惑星の中で「りょうまの星」は 3000 番になった。その後、芸西天文台は新型の望遠鏡に入れ替わった。良い点は、早く正確な導入が出来る。追尾精度が良い。固有運動も追えるオートガイダーが付属。良くない点は、F 数 7 は暗い（一般観望には良いが）。CCD 露出が長くシーイング悪いと、一点に止まらない。19 ~ 20 等星が限界。斜鏡が小さく周辺減光が大きい。メーカーには次世代の改良をお願いしたい。」と結ばれた。

身振り手振り豊かに講演された関会長はご健康そうで、水泳も行かれて鍛錬されている由。それは恩師から「才能を出すには健康でいろ」と言われた言葉を忠実に守り、心がけているからだとおっしゃった。今年から OAA 会長という激務が加わって大変だが、全国の会員の先頭に立って活躍されることを祈りたい。氏のお話には「心眼で見る」という言葉は出なかったが、長く観測一筋に訓練された心身の中には、やはりそういうものがあるのだろうと思われた。関会長のご本職はギター教師と伺う。今回は聴き損なったが、ぜひ見事な名演奏を OAA の大会などで弾いていただきたく思うのは、自分一人では無いと思う。たとえば「ハレー彗星の歌」、「イケヤ・セキ彗星の歌」なども・・・

■長谷川一郎氏 東亜天文学会に期待すること

「人の為になにか出来るような天文愛好家でありたい」短いご挨拶であったが、今後ますます御元気で我々を指導して頂きたい。

■次期開催地

東京（または千葉）に決定、また来年が楽しみですね。